17 『挨穴法』『挨穴明弁』について

田中利江子・橋本典子・山﨑陽子
日本鍼灸研究会

日本近世の経穴学には、当時標準の十四経理論の祖述を旨とするもの以外に、わが国独自の展開が行われた系列がある。特に饗庭東庵―味岡三伯の系統に出た経穴理論が、江戸中期後半以降の経穴学に与えた影響は大きい。この系統の一連の経穴研究のうち、饗庭東庵の『経脈発揮』や堀元厚の『隧輸通攷』は考証的色彩が強く、江戸後期の考証学的経穴研究の先駆となった。他方、味岡三伯の作とされる『医学至要抄』や堀元昌の『挨穴法』『挨穴明弁』は、実践的な経穴学の構築により、以後の経穴学に多大の影響を及ぼした。

『挨穴法』と『挨穴明弁』はいずれも、堀元昌（一七二五～一七六二）の経穴部位に関する口授を門人が書写したものである。堀元昌は堀元厚の嗣子で、名は貞明、字は元昌、号を廻瀾といい、居室を淵々堂と称し、京の四条に住んだが、医系はその子・元徳の代で絶えたという。書題の「挨穴」とは、経穴を意味する堀元昌独特の用語で、堀元昌以降の、「挨穴」の語を冠した多くの経穴書は、なにがしか、堀元昌あるいは堀流経穴学の影響下にあるとみられる。堀元昌の経穴理論の特徴は、先ず「挨穴尺寸法」と題する、十三箇条の独自の骨度法を定め、その準則に基づいて各経穴の位置を述べることにある。

『挨穴法』は、森枳園旧蔵にかかる書写年未詳の写本上下二冊が、京都大学附属図書館富士川文庫（函架番号ア・六）に所蔵されている。他方、『挨穴明弁』は幾つかの写本が伝存するが、前記『挨穴法』と比較すると、構成や解説内容は類似するものの、個々の経穴の解説文や巻末部分その他に、大きな差異がみられる。よって、『挨穴法』と『挨穴明弁』の相互関係と成書年の考察を目的として、両書の比較を行い、その内容を検討した。『挨穴法』は前記富士川本を、また『挨穴明弁』は唯一影印のある京大富士川本（函架番号ア・五〇）を使用したが、後者には誤脱が多いため、平出氏

旧蔵本を参照して補訂した。

①構成　両書とも督脈・任脈・手太陰～足厥陰の順に、所属経穴を解説するが、巻末は全く異なり、『挨穴明弁』は四花患門穴を、『挨穴法』は禁鍼灸穴を論ずる。また『挨穴明弁』は乳根と風市の項を欠くが、『挨穴法』には存在する。更に『挨穴明弁』では臍中、上関の両穴名は、『挨穴法』では神闕、客主人とする。このほか胆経（頭部）・腎経（踵部）の経穴の記載順序に相違が見られる。

②書式体例　『挨穴明弁』は全文和文で書かれている。『挨穴法』は先ず『十四経発揮』記載の取穴部位を漢文で引き、次いで和文で解説を加えるが、漢籍鍼灸書を引く場合その他、しばしば漢文を交える。各穴の解説では、『挨穴明弁』では禁鍼灸穴である場合、先ずそれを載せるが、『挨穴法』では巻末に一括している。解説は、その内容自体は大略一致するも、文章には大きな異同がある。全体的な印象では『挨穴明弁』は古典の引用なども少なく、表現も簡略かつ実用的であるのに対し、『挨穴法』は『甲乙経』『千金方』から『医学入門』に至る広範囲な古典を引用し、より考証的な記述となっている。ただ、経穴によっては『挨穴明弁』の方が詳しい場合もある。経穴図は『挨穴明弁』では経文中に入れられているが、『挨穴法』では天頭にあり、図が相違したり、図が無い場合もある。

③成書年代　平出氏旧蔵本『挨穴明弁』の巻末の記載によれば、その成立は堀元昌生前の一七五八（宝暦八）年、又はそれ以前である。他方、『挨穴法』は、上冊の陶道穴の注によると、元昌の嗣子・元徳以降、即ち一七六二（宝暦一二）年以降の成立である。　以上のことを総合すると、元昌晩年に門人が『挨穴明弁』を編み、元昌没後にそれを更に増補改訂して『挨穴法』が成立した可能性がある。なお『挨穴法』については、今後、国会図書館所蔵の牧九畹〔授〕『挨穴法』の調査を通じ、更に検討を進める予定である。